

26H-pm01

Bevacizumabの副作用調査と外来患者に対する適正使用に向けた薬剤部の取り組み

○板垣 麻衣¹, 山下 めぐみ¹, 櫻井 洋臣¹, 松井 礼子¹, 加藤 裕芳¹, 遠藤 一司¹
(¹国立がんセンター東病院薬)

【目的】Bevacizumab (アバスタチン[®])は2007年6月に発売された世界初の血管新生阻害薬である。併用療法における高い抗腫瘍効果が期待される一方、海外の報告では高血圧など特徴的な副作用が高頻度で起こることが知られている。そのため血圧コントロールは治療継続を左右する重要な因子となりうる。本研究では当院のBevacizumabによる高血圧発現とそれに伴う降圧薬の使用についての調査を行った。さらに現在行っているBevacizumab適正使用に向けた外来患者に対する薬剤部の取り組みについて報告する。

【方法】当院通院治療センターにて2007年6月から9月までにBevacizumabの投与を開始した外来患者を対象とした。診療録および処方オーダーリングシステムを用いて血圧の変化を中心とした副作用の発現について検討した。

【結果および考察】期間中Bevacizumabの投与を行った患者は55例であり、男性39例、女性16例、年齢中央値は63歳(30~76歳)であった。主な副作用として海外の報告と同様に高血圧が認められ、降圧薬によるコントロールを必要とした。降圧薬の追加および増量の繰り返しを必要とする患者も認められた。Bevacizumabの投与は主に外来で行われるため、患者の自宅における血圧コントロールへの理解を得る必要がある。薬剤部では自宅での血圧を含めた副作用発現の確認を行うために記録表を渡している。その記録表を次回来院時に確認することで降圧薬の適正使用の提案が可能となった。以上のことよりBevacizumabによる治療の継続を円滑に進めていくために血圧のコントロールを行うことが必要であり、薬剤師が外来の服薬指導業務の一環として継続的なフォローを行っていくことの重要性が示唆された。